

重度・重複障害の子どもたちとのコミュニケーションを考える

～外の世界は楽しい！人生を豊かにするコミュニケーション力を育てたい！～

娘の夢と共に(一部抜粋) 柴田 直美さん

私の娘は乳幼児期に病気を患い、後遺症として重度の肢体不自由、言語障害があります。現在は二十三歳になり、大学院で修士論文を執筆中です。(中略)

娘は幼少期から目力が強く、表情が豊かだったため、言葉の意味を理解しているようなそぶりを見せていました。そのため、言葉が話せなくても、ある程度の意思疎通はできていたような気がします。当時私は、娘に理解力があることを前提に行動していました。その中でも一番気を付けていたのが、娘の前でなるべく「できない」という言葉を使用しないということです。(中略)障がいを持つ子どもにとって、自己肯定感が低くなり、やる気が無くなるのが一番怖いことだと感じます。

(中略)私が「娘がもっと話を簡単にできるように、脳波で言葉を伝える時代がくるのを待っています」と言うと、「心の中の言葉が全部洩れたら、それはそれで辛くないですか」とおっしゃる先生もいました。確かに私たちは言葉を選んで会話をしています。障がいをもっているからといって個人の考えすべてが漏洩するのは辛いことだと改めて感じました。このように子どもたちのことを親身になって考えてくださる先生方との出会いが娘を大きく成長させてくれました。

『手記 わが家のお宝さん 泣き 笑い 育ち合う』編著者 一門 恵子 より

【私の反省】👉 1人の個としてではなく、重度・重複障害のある人として見ていないか…

👉 わからないと決めつけて関わっていないか…

👉 その人の気持ちを決めつけて、わかったつもりで関わっていないか…

【例えばこんな場面】

「お茶とお水どちらを飲みますか？」



⇒「今は喉がかわいていません」「あとで飲みたいです」

⇒「ジュースが飲みたいです」「炭酸をください」「コーヒーが飲みたい」

⇒「もっと熱いお茶が飲みたい」「紅茶はないのかな」

⇒「もっと冷たい水が飲みたい」「1杯では足りません」

「喉乾いた?」「何か飲む?」という問いを私たちはしませんか?でも、重度・重複障害のある人には選択肢を与えて、お茶か水のような問いをしてしまいます。そして、その反応を見て、「飲みたくないのかな」「お茶にしようか」とわかったつもりで関わっていました。

👉 本当はもっと内面に思いがあるかもしれません。

👉 自分の思いが伝わらない経験から表出がないのかもしれません。

👉 表出したくなるような学習経験が必要なのかもしれません。

👉 私たちが受け止められないだけで、表出しているのかもしれません。

👉 周囲の音や光、体の不随意的な動きなどが関わりを妨げているのかもしれません。

『**黙って観る(観察)コミュニケーション**』編著者 武長 龍樹・巖淵 守・中邑 賢龍 より
「学校や福祉施設の現場で、障害のある子どもの横に黙って寄り添っているだけでは何もしていないようにみられてしまうことがほとんどです。そのため、多くの人が何か話しかけなくてはいけないと感じてしまうのではないのでしょうか。」
「相手がゆっくりで、しかも、その動きが微細であるならば、我々もゆっくりと彼らを見つめるところから始めなくては いけません。**黙って観ているのは何もしていないのではなく、これこそが彼らとのコミュニケーションの始まりです。**」

【照明を変える、部屋を変える、周囲の音を変える、姿勢を変える】など**試してみる!**

【**一度拒否したからと選択肢から除外しない**】私たちが初めてのことには抵抗があります。また、その時は拒否しても嫌いではないこともあります。好きなものばかりが選択肢にあるのでは、子どもの反応を観察し受け止めることは難しくなります。自己決定する機会は障害の有無によらず大事なことです。

【**待つ**】ことは大事! 反応がないと焦って言葉を掛けたり選択肢を与えたりしてしまいます。しかし、待つことで反応を観察したり反応を引き出したりすることができます。

【**子どもの反応を分かりやすくするテクノロジー**】もある!

○カメラで微細な反応を増幅・可視化する技術(OAK)

「モーションヒストリー」機能で子どもの体のどの部分がよく動いたかを評価できる。

○ゆっくりとした動きを可視化する方法(インターバル撮影)

【**コミュニケーション手段はたくさんある**】

○盲ろう・・・指文字、触手話、パソコン(ピンディスプレイ)

○知的障害+ASD・・・絵や写真やシンボル、タイムエイド、音楽やチャイム、VOCA

○重度重複障害・・・スイッチ、VOCA

困難をイメージしてみることが大事です。たとえば、スイッチにも様々なものがあります。

ゆっくりと観察し、その人に合った方法を見つけ、自分の働きかけで外界が変化するという経験を積み重ねることで、表出を引き出していくことができます。



相手を観察すること、相手の立場に立って考えることはコミュニケーションを取る上で普段から私たちがしていることです。重度・重複障害のある人は、外界に働き掛ける手段を見つけるということが私たちより必要なだけです。外界に働き掛けても返ってこない経験、外界からの刺激を得にくい状況、外界とのつながり方がわからない状況をイメージし、ゆっくり観察し向き合うことが大事だと思います。外界との関わり、コミュニケーション能力は、人生を豊かにします。人間同士として関わることを楽しみながら、その力を育てていけたらいいなと思いました。

【参考・引用文献】

『手記 わが家のお宝さん 泣き 笑い 育ち合う』

編著者 一門 恵子

『黙って観るコミュニケーション 重度・重複障害の子ども達とのコミュニケーションのポイント』

編著者 武長 龍樹・巖淵 守・中邑 賢龍

『AAC 入門 コミュニケーションに困難を抱える人とのコミュニケーションの技法』

著者 中邑 賢龍